

# God Save THE QUEEN!

去る2022年9月8日、歴代最長の70年にわたって英国を導いてきた、エリザベス女王2世が永眠された。  
ここでは女王にしか持ち得なかった特異なファッション観を通し、改めてその功績に迫りたい。

Photo/Yoshika Amino, Aflo Text/Masato Kurosawa  
Photo/Keiichi Ito, Satoshi Ohmura Text/Shunai Sato, Tamaki Itakura

「私よりも公々を重んじる精神を投影した装い。」

女王は英国文化の象徴であり、英国民のアイドルでもあった。ひと度公衆の面前に姿を現せば、クイーンのお称である「Queenie」(クイニー)、「」という叫びが、そこかしこからこだました。中野さんは言う。「女王は『私はイギリスに生涯、奉仕する』と誓い、90歳を超えてなお公務を続けていらっしやいました。体調が悪くて公務に出ないということもほとんどなく、国民たちは次々と貴族を輩たす姿を見続けてきた。母や祖母のように愛されていたことも不思議ではありません。そうして70年もの間、象徴としての役割をまっとうしてきた女王だからこそ確立し得た、独自のファッションスタイルが存在する。それが『ワンスタイル・マルチシェード』です。これはつまり、『スタイルはひとつ、色は多色』という考え、女王はトレンドに左右されることなく、ブレずにこのスタイルを実践し続けていました。コートドレスを基本とした黒色のセットアップに、新しい色の帽子、ロウナーのバッグと黒い靴(たまに白)。どんな時もシルエットは変わらないけれど、ありとあらゆる色を着る。この装いは常に国民の敬愛を受けるために、遠くからでも『あそこに女王がいる!』とわかるよう、女王が貫き通したスタイルなのです。ファッションは通常、自らが好きな物を、好きなように身につけるのが醍醐味だ。しかし女王は自らの好みよりも国民の心の拠りどころであることを優先した。その威私奉公の精神に改めて敬意と追悼の意を捧げたい。」

女王とファッション。



# HISTORY

## 改めて振り返る女王の足跡

1924年 1

### 誕生

ヨーク公アルバート王子(後のジョージ6世)と、エリザベス王妃の長女として誕生。祖父であるジョージ5世からも寵愛されていた。

1945年 1

### 英国軍の女性部隊に入隊

第二次大戦中、国民との距離の森を消すべく、英国陸軍の女性部隊に入隊。自動車部隊をはじめとする後方任務に就いたことも。

1947年 1

### ギリシャおよび

### デンマーク王子フィリップと結婚

フィリップ殿下とは18歳の差があるが、21歳で嫁れて結婚。殿下が2021年に永眠されるまで、74年もの間寄り添っていた。

1948年 1

### 長男・現国王チャールズ3世を産出

50年には長女・アン王女を、60年には次男・アンドルー王子を、64年には三男・エドワード王子を産出。三男一女に育まれた。

1952年 1

### エリザベス2世として英国女王に即位

2月6日、父ジョージ6世が病没。女王はケニアを訪れていた最中、急報に押し、急遽ロンドンに戻り、王位を引き継ぐことに。

1975年 1

### 日本に公式訪問

夫のエディンバラ公フィリップ殿下とともに来日。皇宮や伊勢神宮、京都府などを訪れ、昭和天皇や皇后陛下とも面会された。

1986年 1

### 英国の君主として初めて中国を訪問

中国への香港返還が合意したことを受けて中国を初訪問。当時の最高指導者だった鄧小平らと会談し、万葉の長城なども視察された。

2012年 1

### ロンドン五輪の開会式に登場

映画「007」シリーズのジェームズ・ボンド(ダニエル・クレイグ)との共演映像が流れると、会場は割れんばかりの歓声に包まれた。

1 2022年 1

### 英国君主として史上初となる

### 即位70周年「プラチナジュビリー」を迎える

2月6日に即位70年を迎えると、その偉業を祝い英国では毎月2日から5日まで、11月に4日間もセレブレーションが行われた。

1 2022年 1

### 9月8日に永眠

プラチナ・ジュビリーの祝賀ムードも冷めやらぬ9月8日、スコットランドのバalmoraleで永眠。世界中から追悼の意が表された。



身につけるものはすべて「ブロップ」とよぶ(芝居の小道具)

## 女王が確立した「ワンススタイル・マルチシエード」

女王の一手一足は、英国内のみならず、世界中に影響されることが多かった。女王はその状況をネガティブに捉えることなく、むしろ国民の振り所としての役割を担ううえでも、英国文化を広く知らしめるうえでも好機と捉えていた。その私利私欲を遠ざける高潔な精神の象徴こそが、このワンススタイル・マルチシエードだろう。女王は着用する物を「ブロップ(芝居の小道具)」と呼び、いつでも自分の姿を見つければよいように振っていた。まさに時代の演出家でもあったのだ。



服飾史家  
中野幸子さん



『ロイヤルスタイル  
英国女王  
ファッション史』

英国文化やファッション・ブティックの専門家として、これまで2冊の著書『ロイヤルスタイル』のほか、書の内容に基づいた書籍も多数執筆。ロイヤルファミリーオブファッション、民衆に馴染み深い、真実を伝えている。

# ROYAL WARRANT

## 王位が継承されたいま、 改めてロイヤルワラントを考える。

女王が逝去され、新たにチャールズ3世が英国王として即位された。それを受け、いま英国ではロイヤルワラントを通り、さまざま企業の動向が注目されている。本来どのような役割を持ち、どのような企業がその荣誉に与れるのか。改めて把握したい。

Photo/Takuya Furusue, Aflo Styling/Shogo Yoshimura Text/Masato Kurosawa

850年以上の歴史を持つ  
英国王室御用達の証。

そもそもロイヤルワラントとは何なのか。簡潔でもご教示いただいた服飾史家・中野香織さんは語る。「英国王室御用達認定証は、自国産業の奨励、伝統技術の継承を目的に作られました。歴史は古く、1155年にヘンリー2世によって、同業者組合に対してロイヤルチャーター（国王勅許状）が与えられたことが、最古の記録として存在しています。15世紀頃に現在の名称になったのですが、元々は君主への私的なサービスに対する感謝のしるしとして始まりました。しかし国家への公的な貢献に対する褒美としては熱量が存在しています。勲章はあげられないけれど、感謝を表して公認の荣誉を与えたい、その気持ちの表れがロイヤルワラントなのです」。申請する業者には厳しい審査が課されることでも有名な「資格は過去7年間のうち5年以上、王室の認定メンバーに定期的かつ継続的に製品またはサービスを提供していること。申請者は適切な環境・持続可能性方針と行動計画を有していることを証明する必要もあります。現在のこの荣誉にあずかっている企業は800社以上。衣類や靴などはもちろんのこと、園芸用の土や歯磨きペーストまで、あらゆる企業に授与されています」。いずれも厳正な審査を経て認可されており、高品質の証としても浸透している。同時に王室に「英国文化の深奥に身近に触れられる契機」として、ロイヤルワラントホルダーがリスベクトされることは今後とも変わらないう。



これまで認可されていた3つのワラント

右からチャールズ皇太子（新国王）、エディンバラ公フィリップ殿下、エリザベス女王。最近までワラントの認定資格を持つメンバーは3名だった。しかし2021年にフィリップ殿下が、2022年にエリザベス女王が承継され、現在ではチャールズ新国王のみ。ウィリアム皇太子を筆頭に、今後新たにメンバーが加わる可能性も考えられるが、先の2名が認定したロイヤルワラントも、没後2年までつけることが可能とされている。



### Dents

デント

厳冠式で特製の手袋を着用。

1777年に創業した最高峰メーカー。1953年にエリザベス女王が即位される際、厳冠式で用事されたのも同社の手袋だった。その歴史の手袋は、現在ウィルトシャー州ウォーミンスターのデント博物館に収蔵されている。



### Corgi

コーギー

国葬で衛兵が靴下を着用。

1892年創業の名門ニットメーカーは、長い間英国軍に軍足を納入してきただけあって、王室との関係も密。さきのエリザベス女王2世の国葬においても、一部の衛兵たちは同社のチェック地のソックスを着用していた。

名門と女王の  
こぼれ話。